

## 作文部門 小学生の部

なみだの思い出大谷石（大谷石）

茂木町立逆川小学校 六年 川田 幸央

大谷石は栃木県宇都宮市にある大谷町で採掘されている石材です。栃木県では、大谷石が使われている建物をよく見かけます。火に強く、軽くて柔らかいので加工しやすいことから、住宅や倉庫、石垣だけでなく、パンやピザを焼くためのかまにも用いられています。また、宇都宮駅東口に設置されている有名な餃子像にも大谷石が用いられています。

ぼくの家では、半年前までガソリンスタンドを経営していました。祖父母が中心となって、四十年以上営業を続けてきたスタンドです。学校が終

わって帰たくするとスタンドへ行き、休けい室で宿題をやるのが日課になっていました。お客さんがいない時には、祖父母が問題の解き方を教えてくれたり、いろいろな話をしてくれたりしました。だからぼくは、祖父母が働くスタンドが大好きでした。

ある日、いつものように祖父と会話をしていると、祖父がこんなことを聞いてきました。

「この壁って何で作られたのか分かるかい。」

僕は、

「コンクリートじゃないの。」

と答えました。すると祖父はこう言いました。

「そうだと思うだろう。でも、違うんだよ。この

壁は大谷石で作られた物なんだよ。」

僕はこの時、スタンドの壁に大谷石が使われてい

ることを初めて知りました。大谷石について調べてみると、とても伝統のある石材だと分かり、今まで以上にスタンドを誇らしく思うようになりました。

でも、祖父母も年を重ね、スタンドでの仕事があるようにできなくなってきました。家族で相談して、スタンドを取りこわすことにしました。スタンドが取りこわされている時祖父母との大事な思い出も消えてしまうようで、とてもかなしい気持ちになりました。スタンドは跡形もなくきれいに片付けられ、何もなしさら地になってしまいました。僕はその光景を見て「壁は大谷石で作られている」という祖父の話の思い出し、大谷石のことをもっと知りたいと強く思うようになりました。そして、夏休みに両親に頼みこんで「大谷資料館」

へ連れて行ってもらうことにしました。

採石場跡には、野球場が一つ入ってしまうほどの広大な地下空洞がありました。中に入ってみると上着を着ていてもはだ寒く感じました。一方通行の道を進むと、物語の世界に吸いこまれたような不思議な空間が広がっていました。映画やドラマなどの撮影が行われた場所や、大きな大谷石がライトアップされている場所もありました。ざらざらとした大谷石を触っているとガソリンスタンドが取りこわされた日のことを思い出し、自然になみだがこぼれてきました。

大谷石は、火に強く、軽くて加工しやすいという特徴がありますが、ぼくにとってはさらに大切な思い出のある石材です。世界中の人に大谷石の力を知ってもらいたいです。

## 雲巖寺雲水体験（雲巖寺）

大田原市立須賀川小学校 六年 戸村 俊輔

雲巖寺というお寺が学校の近くに建っている。

ぼくたち須賀川小学校では、毎年五・六年生の学年部会行事として、雲巖寺に泊まり、雲水体験を行っている。今年も十二人が参加して、食事や作務の川掃除、座禅等を体験した。

ぼくは今年で二年目なので当日をとっても楽しみにしていた。

雲巖寺では、まず、おわんやはしなどを決め、紙に名前を書き、その上に置いた。理由は、そのおわんやはしなどは、毎回洗わずに、食事の最後に湯を入れて指で汚れを取り、それを全て飲みほす。だから自分のものを決めるのだ。初めてのときはびっくりしたけれど、元々は食べるものと思

えば大丈夫だった。

次は、雲巖寺のたもとを流れる武茂川の清掃をした。橋の上から見るときれいな見えるけど、下においてみると、とてもごみが落ちていた。ほんどのごみを取り終えて川をながめると、とてもすっきりした気分になった。

川掃除の後、雲水さんがお風呂の用意をしてくれた。普段の雲水さんの仕事は、老師の身のまわりの世話や作務、お経を上げることなどだそうだ。雲水さんは、てきぱきと動いていて、本当にすごいと思った。

次に本堂で座禅を組んだり、お経を読んだりした。座禅は昨年にも上手に組めなかったし、今年も上手に組めなかった。目を半分つむると、いろいろな考えが頭を回る。お経は、とても長くて言い

づらい言葉だったし、早く読むので、間に合わなかった。学校や家からあまり遠くないのに、別の世界にきたような気分になった。こんな体験ができるのはとてもありがたいことだと思った。

お経の後は、夕食の準備にとりかかる。保護者や雲水さんといっしょに料理を作った。みんなで長いテーブルに座り、老師から食事の心得を教えただけだった。五つのおわんに盛り付け、はしはテーブルの外に少しだけ出す。食事のときはしゃべらず静かに一つ一つおわんを持って食べる。なぜ雲巖寺ではできるのに、家ではできないのだろうと思った。

夜は、テレビもゲームもないのにとっても楽しく話をしたり、雲巖寺の探検をしたりした。勉強や部活では味わえない楽しさだった。そして次の日

は、朝四時半起床なので、起きられるか心配だったが、すぐにねてしまった。

翌日の早朝、般若心経を読み、本堂で老師の説法を聞いた。その中で雲巖寺の歴史についての話があった。六年の社会で歴史を学んでいるところだが、雲巖寺の歴史にも武士が登場しおどろいた。北条氏や秀吉軍に建物を焼かれたこともあったそうだった。

今、雲巖寺にはバスや車で多くの方が観光に来ている。その様子を見て、老師は「寺は人が内なるものに心を置く道場である。」と考えているそうだ。地域にこんなすてきな場所があること、本当に幸せなことだと思う。

## 心をつなぐ真岡てつ道（真岡鐵道）

茂木町立逆川小学校 六年 渡邊 菜由奈

栃木県の電車と言えば、私は「真岡てつ道」を思い浮かべます。真岡てつ道は、明治四十五年に開業しました。現在のように全通したのは大正九年のことです。

真岡てつ道は、電気を使わずに蒸気で走る「SLもおか号」として、毎週末線路の上を走っています。私が住んでいる茂木町でもSLが走っています。茂木の道の駅周辺ではSLの姿を写真に収めようと、カメラを持った人がたくさん集まっています。そんなSLは「コットン、コットン」と走ることから、「コットン・ウェイ」と親しみを込めて呼ばれています。真岡駅には鉄道博物館があり、真岡てつ道やSLの歴史や変容をくわしく

知ることが出来ます。鉄道ファンだけでなく、一般客も昔のSLの写真などを楽しんでします。

私が初めてSLに乗ったのは、年長での遠足の時でした。真岡駅から茂木駅までSLに乗りました。SLは、たくさんの人が乗っていたので少し暑く、「ゴトンゴトン」走るたびに体があちらこちらにゆれました。

しばらく走っていると、突然「ポー」という大きな汽笛の音がしました。その音に驚いて、泣き出してしまふ友達もいました。私は、どうして汽笛を鳴らすのか不思議でした。先生に聞いてみると、

「路線で働いている人や近くにいる人に列車が近づいていることを知らせるためだよ。列車は急には止まれないからね。」

と教えてくれました。人を驚かすためだと思って  
いた汽笛が、人を思いやる優しさだったと知り、  
安心したのを覚えています。

おやつの間を楽しみ、茂木駅までの道のりの  
半分ぐらい過ぎたころ、私にとって忘れられない  
出来事が起こりました。ある駅で、大きな荷物を  
手に持ったおばあさんが乗ってきました。しばらく  
く席を探していましたが空いていないと知り、肩  
を落としたように窓際に立っていました。すると、  
その様子を見ていた先生が、さっと自分が座って  
いた席をゆずりました。席をゆずっている姿を見  
たのは、それが初めてのことでした。今でもその  
光景ははっきりと目に焼き付いています。私は先  
生の行動を見て、なぜかうれしくなりました。

SLを降りた後、駅員さんに全員で

「ありがとうございます。」

と言うと、駅員さんにはっこりして、

「どういたしまして。」

と言いました。私は、先生のような行動ができた  
かなと思い、少しほこらしい気持ちになりました。

その後、先生に行動の理由を聞くと、

「先生も、真岡でつ道で学んだんだよ。」

と言いました。高校生の時に席をゆずっている人  
を見て、心を打たれたそうです。

私は、真岡でつ道でとても大切なことを学びま  
した。これから先もずっと、人の思いをつなぐて  
つ道であってほしいと思います。

## 作文部門 中学生の部

### 人間の感情（相田みつを）

栃木県立宇都宮東高等学校附属中学校

二年 伊藤 慎気

相田みつをは、私の人生観を変えた人だ。私が相田みつをの作品と初めて出会ったのは、東京で行われていた相田みつを美術館に行ったときだ。

相田みつを美術館に行ったのは小学五年生のときだ。その日は旅行の帰りだった。東京駅に着いたとき母が、

「相田みつを美術館があるけど見てみようか。」ときそわれた。自分はそのとき相田みつをの名前を初めて聞き、どのような人かも知らなかったが母について行くように館内へ入った。ところが彼

の作品を見て私は衝撃を受けた。特に「ひとつの事でもなかなか思うようにはならぬものですだからわたしはひとつのことを一生けんめいやっているのです」という作品だ。私はこれを読んだときとても感動したことを覚えている。私はそのころ習い事や勉強で悩んでいた。しかしこの作品を見て、たくさんのもので悩まず一斉に考えようとならないで、一つ一つを一生けんめいがんばることが大切なのだ気づき、救われた気分だった。とても感動した私は美術館で作品集を買った。現在それを読み直すと、改めて感じるものがたくさんある。人の生き方や命について、人と人との関係、日々の過ごし方を教えられる。その中で私は、「エンジン」という作品に心を引かれた。「あのねえ、自分にエンジンをかけるのは自分自身だから

らね」という詩だ。これを読んだとき、自分のことを見すかされているような気分になった。今私は親に勉強をなさいななどと言われてしまう。さらには勉強の仕方についても言われてしまった。最近成績は下がってきてしまっているが、自分自身では何も変えず、そのままにしてしまっている。しかし、この作品を見たとき、

「自分は何もしていない。周りから言われて何かをするのではなく、自分でエンジンをかけ、自分から始めなくてはいけない。」と気づいた。部活動でもそうだ。先生から言われなくても、それを聞いて自分でエンジンをかけ、実行しなくてはいけない。何を始めるにも自分で始めなければ続かない。エンジンをかけるといふことは何かをすることに対してのやる気を出すことだ

から。

私は相田みつをに出会ってから、あたりまえのことに對しての考え方が変わった。人間の感情、命について。あたりまえだから言われてから思い返すことも多い。だからあたりまえのことに気づけることはすごいと思う。自分もあたり前に気づかなかった。だが、今はあたりまえの感情に気づいた。これから何かに悩んだら一度立ち止まり、相田みつをの作品を思い出し、前に進んでいきたい。そして、相田みつをがこの栃木県で生まれ、数々の作品を生み出してきたことを誇らしく思う。



## 日光二荒山神社と竹（日光二荒山神社）

益子町立七井中学校 一年 小林 愛奈

日光二荒山神社は、ユネスコの世界遺産に登録されている重要文化財です。その二荒山神社では師走を迎えると、よい新年になる事を願って幣束作りが行われます。その幣束に使われる竹は、祖父母が竹林から竹を切り出し、トラックに積んで持ってきた物です。その竹を三十センチの長さにし、細かくさいて、稲妻形に切った和紙をみこが竹に挟み、幣束頒布祭までに一万体を作るそうです。

また祖父母は、その幣束に必要な竹を十二月の寒い中、一五〇〇本も切り出します。竹は今年に生えた竹を取ります。私も手伝いをします。竹林に入り今年に生えた竹を見つけては、根本から切ります。祖父母は慣れた手つきで次々に竹を切ります。私は

なかなか切れず時間がかかりますが、自分が切った竹が倒れる瞬間を見ると「やったー。」と叫びそうなくらい嬉しくなります。祖母は腰が痛いのに手早く切りながら「この竹が皆に幸せを運ぶ役目をしているから、心を込めて切っているんだよ。」と言いました。私は遊び半分で切っていたのが恥ずかしくなりました。

その後、幣束作りをしている様子を、テレビで放映されたのを見ました。私は、一生懸命に竹を切り出している姿の祖父母が目につかび、「幸せがたくさんの人に届くといいな。」と思いました。また、神橋の鳥居に飾られる門松も、祖父母が取った竹と松が使われています。神橋は、日光二荒山神社の建物で、日光の玄関とも言われる美しい橋です。私も何回か見た事がありますが、その

美しい朱塗りの橋に引きつけられ見とれてしまいます。そんな日光の玄関口にも祖父母が取った物が飾られていると思うと、少し自慢したい気持ちになりました。

十二月の霜のおりる日にも、祖父母は山に入り竹と松を取ります。ただ取るだけでなく、門松にした時によく見える物を取るそうです。

四月には、日光に春を告げる弥生祭が行われます。その花家体には、竹を細かくさいた物の先にあしおつつじの造花が飾られています。その竹も祖父母が取ったものです。彫刻が彫られた花屋体が豪華に飾りつけされ、町中に繰り出されます。

このお祭りは奈良時代から行われている由緒ある祭りだと聞き、祖父母がとても誇らしく思えました。

年に三回、竹を届けるようになったのは、親せきが日光で材木店を営んでおり、また、日光二荒山神社の役員である関係から、頼まれるようになったそうです。日光は寒くて竹の成育が悪く、あまり大きくならないので、私の住む益子町から竹を持って行くようになったのです。

栃木と言えば「日光」と言われる程、有名です。そんな栃木を代表する場所に、祖父母と一緒に取った竹が使われる事はとても光栄に思います。これから多くの人が、日光を訪ねてほしいと思います。

先人たちの「拓魂」(那須疎水)

栃木県立宇都宮東高等学校附属中学校

二年 小林 海音

今からわずか百四十年ほど前まで、私が住んでいる那須野が原の地域には人が住めないほどの荒野が広がっていたそうだ。一世紀半ほど経った今では、それが信じられないほど人と緑があふれる豊かな大地となっている。小学生の時にそれもたくさんの先人たちのおかげだと習ったことを思い出した。

きっと想像もできないほどの苦労があったことだろう。そんな那須野が原の開拓の歴史の中で、絶対に忘れてはならないものの一つが「那須疎水」だと思う。

荒野を開拓し、農地を耕し、人々が生活するた

めには、大地を潤す水が必要不可欠である。那須野が原は扇状地で水はけがよく、水をためておくことができない土地だった。井土水を得るにもかなり深く掘らなければならないことや、川が低い位置を流れているため水を引き込むことができないなど、水があっても有効に利用できなかったといわれている。広大な那須野が原の大地を荒れ果てたままにしておくことをもつたいなと思った先人たちが、何とかして水を行きわたらせようと考え出したのが那須疎水である。那須野が原の北端にあたる那珂川から取水し、短冊状に張り巡らされた水路が四千ヘクターもの広大な土地を潤すことになる。その基幹部分は、わずか五か月程度で完成したという。当時の国の土木工事予算の一割も充てられたというから驚きだ。それほどま

での想いと熱意が今につながっているのだろう。

今では、那須野が原の大部分にあたる那須塩原市と大田原市で年間約六万トンの米が収穫されている。これは栃木県全体の五分の一ほどにあたるそうだ。さらに人口は両市合わせて約十九万人にもなる。先人たちがここまでの発展を予期していたかまではわからない。だが、もし那須疎水が無かったら、間違いなくこの一帯の発展は遅れていたことだろう。私たちがこの那須野が原に住んでいるころもなかったかもしれない。たった百年余りでここまで発展することは、日本の歴史の中でも稀なことだそうだ。那須疎水がそのきっかけとなっていることは間違いないと思う。

那須野が原には、「拓魂」と書かれた碑がある。私は当時の開拓者たちの想いと熱意を表した言葉

のように思う。拓くとは前例のないことにチャレンジし、困難を実現することだ。開拓は時代を築き、それらを次へつないでいく大きな一歩だと思う。那須疎水はその象徴ともいうべきものだ。私たちはそんな先人たちの熱い「拓魂」の上に生きている。そしてその想いを引き継いで、今度は私たちが未来を切り拓いていかなければならない、那須疎水の那珂川取水口に立ってみて改めてそう思った。同時に、そう思わせるこの故郷の拓魂の象徴に誇りを感じることができた。その誇りを胸に、那須野が原の子として、これからを歩んでいきたい。